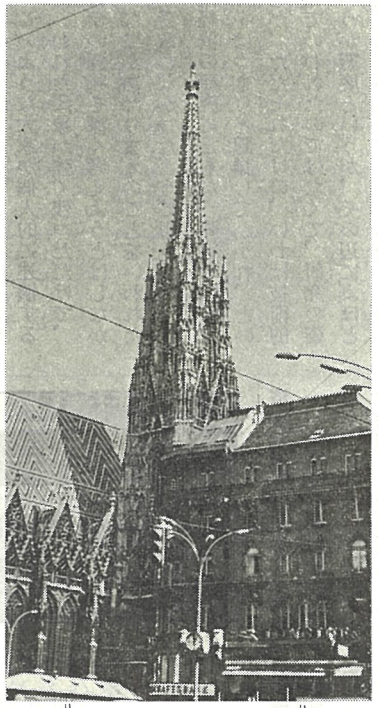
# オーストリアのいろいろ

辻本金治



シュテフアンス・ドーム

オーストリアという国は案外日本には知られていない。日本人旅行者でこの国に立寄る人も、せいぜいウィーンに二三日というのが多く、それ以外の地方はほとんど知られていない実情である。現在ウィーンに住んでいる日本人は約百五十人だが、その多くは音楽関係の人たちで、歴史の古いウィーン大学にも日本人留学生は意外に少ないし、商工業関係の在留者は至って少ない。それからこの国自身、かつては大ドイツの中核として世界歴史上に華々しい活躍をしたのに引きかえて、今は周囲の領土はことごとく削り取られたり、独立分離したりして、国土も狭く、位置からいっても南東に偏していてやや中心から外れた感があり、その上全く海に面していないところから海外貿易に進出する機会もなく、ヨーロッパにおける政治的発言力もはなはだ微弱なものになってしまった。結局それやこれやで、日本および日本人からは関心の薄い国となっているが、出かけて行って実際に住みついて見ると、なかなかいい国であることがだんだんと分って来る。

## ウィーンの町

この国の人口は全部で約七百万というのだから東京都一つにも及ばないのに、その約四分の一が首都ウィーンに集まっている。したがって政治・経済・文化芸術のほとんどすべてがここに集中しているのも当然といえる。

この市もやはり大戦中ひどい砲爆撃をうけて大部分が破壊されたが、現在はほとんど旧に復している。町を歩いて見ても、その惨禍の跡を全く見ることが出来ない。しかも、つくづく感心させられるのは、旧いものをこの上もなく尊重し、かつこれに深い愛着を注ぎつつ、昔のまま再現している点である。そのために、町全体がまことに整然としていて、この物騒がしい現代においても、しっとりとした落着きを失っていない。多分、ヨーロッパで最も親しみの持てる都市ということが出来よう。

ここでちょっと比較するなら、例えばローマは、古代の遺跡を誇示しているけれども、それもどうやら、他国からの客人に見せびらかしたり、或いは観光資源として重んじているにすぎないように思われてならない。ローマ人が果してこれに十分な愛着を持っているのだろうか、疑いなきを得ない。このことは、東欧の美しい町ブダペストやプラハについても言えることと思う。ドナウに跨るブダペストの、旅人を楽しませる明るく開けた眺望や、プラハの古城の下に静かに流れるモルダウ河のあたりの情趣などは、今は共産社会に育つ市民にとっては縁なきものになっているように感じられる。

これに反して、ウィーンの人たちはこの市が全盛を極めたマリア・テレサの時代を追慕し、その時代のものをそのまま、そおっと持ちつづけたいと念願している。人情においても、その時代とあまり変っていないのじゃないかと思われる。道に立止ってキョロキョロしていると、必ず誰かが寄って来て手助けしてくれる。道を尋ねてその人も知らない時は、様子で分るのか、他の人がさっと寄って来る。すべてについて驚くほど親切であり、その親切が心の中から自然に出て来るといった感じだ。

ウィーンの町並は、大通りだけでなく間の筋や横町でも、町外れに至るまで、四階建の大きな建物がぎっしり並んでいる。このことだけなら他のヨーロッパの都市にも見られる現象だが、この町の特色は、それが全部古いバロック様式で統一されていることである。大通りにはごくまれにアメリカ風の建築を見られるが、それとの調和を壊さないように深い考慮が払われている。だから市内のどこを歩きまわっても、不思議にあたりとそぐわないような建物に出くわさない。車が日本より遙かに多く、そのため特に横町では、道幅がかなり広いにもかかわらずひどい混雑を呈しているのだが、このことさえなければ、古風な、どっしりした町並と小さな石畳を敷きつめた道路はきっと二百年の昔を感じさせるに違いない。現に、私のしばらく住んでいた家は、入口の廊下からしてすでに古色蒼然としていて、その中の調度類といったらすべて十八世紀を思わせるものばかり、部屋の中に静かに坐っているとまるで時代を逆戻りしたような錯覚が起る。

都心部を取り巻くリングと呼ばれる広い環状道路に沿って、或はその付近には、恐ろしく巨大な建物がある。シュテファンスドームという、市民に大変親しまれている、とてつもなく背の高い大寺院、ホーフブルクと呼ばれる大宮殿、世界で有名な大美術館など、ちょっと日本では見られないほどの大きさなのだが、それがまた不思議にも周囲の風景によく溶け込んでいる。とに角この町にはおよそ不調和というものが全然見当らないのである。そのうえ到るところに花がある。公園や広場はもちろんのこと、ちょっとした空地に、厳冬を除いてどんな季節でも、色とりどりの花が咲いている。

## ウィーンの劇場

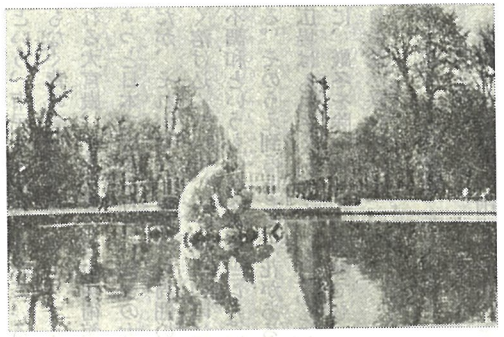
世界でも名高い「国立オペラ」と「ブルク

劇場」の内部は、堂々たる大理石の階段、廊下の方々に立つ美しい彫刻、天井には金色まばゆいきらびやかな彫り模様という工合に、まるで御殿のように壮麗であるが、その入口の廊下に立っている案内人からして、金モールのついた立派な制服を着ていて、なかなかいかめしい。こちらもよほどきちんとした服装をしていないと気恥じかしくなるくらいだ。幕間になると、盛装した紳士淑女が腕を組んで廊下をゾロゾロ歩き出す。これがいつの間にか自然に二列縦隊みたいになって、廊下をぐるりとひとまわりし、突当るとまた引返して来る。多分この劇場が建った頃からずっと同じ習慣が残っているのだろう。これをボンヤリ眺めているのもまた楽しい風景である。

演し物は日本とは違って毎日異ったもの、しかも一つだけである。だから見たいと思っているものを売切れか何かで見逃すと、もう一度というチャンスはなかなか来ない。オペラではドイツ物よりイタリー物がずっと多かった。劇の方でも翻訳ものが遙かに多かった。私はドイツ劇を研究するために行ったのだからというので、なるべくドイツ物に限ろうとしたために、思ったほど多くを知ることが出来なかった。ウィーンはやはりドイツの諸都市よりも国際色が強いので、こうなっているものと考えられる。（映画ではドイツ国内でさえドイツ物があまり多くない。）それでも私はここで、ドイツでも極めてまれにしか上演されないファウスト第二部を観ることを得たのは思いがけない収獲だった。

ともあれ、この二つは世界的レベルの一流劇場だから、外国人の観客が非常に多く、また市民の社交場ともなっているので、主として上流の人たちが席を占めている。学生たちは一階後方の立見席に陣どっている。

これに対して庶民の劇場としては、国民オペラ劇場（フォルクスオーパー）、ウィーン川劇場（アン・デア・ウィーン）、ヨーゼフ町劇場（ヨーゼフシュタット）その他多くの小劇場があってそれぞれの特色を生かしている。国民オペラは大劇場で、やはり毎日違った物を上演するが、その選び方は前述の劇場よりはややドイツ的である。後の二つは中劇場で一つのものをかなり長期間続演の方針をとっている。演し物は違うが、共にウィーン人の好みを狙っている。私の滞在した頃は、「ウィーン川」の方は日本でもよく知られているメリー・ウィドウを二ヵ月ほど満員の盛況で続けていた。この作はこの地で生まれ、オペレッタの中興を成したという因縁の深いものなんだが、観ていると全くウィーンの雰囲気にぴったりで、主演をやっている二人の俳優のすばらしい巧さも加わって、圧倒的な人気を博していた。「ヨーゼフ町」の方は、早くから一度行きなさいと勧められていたのだが、ずっと翻訳物ばかりだったので、いつかドイツ物をと待っている中に帰る間際になってしまって、やはり土地の人に親しまれているこの劇場を一度は訪れたいと考えて出かけた。小じんまりとした感じのいい劇場で、演技もなかなか感動的だった。ところで、ヨーロッパ劇場はどこでも、日本のように親切な筋書のついたプログラムを出さないので、あらかじめ筋を知っていないとまことに都合が悪い。この場合、私は何の準備もなしにぶっつけで行ったものだから、多少分り難いところもあるのはやむを得ないことだった。



シェーンブルン公園

ブルク劇場

なお、この他にも小劇場が幾つもあって、それらがすべて、毎日満員の観衆を迎えているのだから、大したものだと感心する。思えば京都の場合、ウィーンより人口で僅かばかり少ないだけなのに、芸術文化の都と称しながら、一つの本格な劇場も維持出来ず、南座のような由緒のある殿堂が下らない流行歌手や浪花節ごときに利用されているのは、実に情けないことだと慨嘆せざるを得ない。

ウィーンについてはなお、美術や音楽、それから美しい公園のことも語らねばならないのだが、誌面の都合上これは省略せざるを得ない。

**オーストリアの田園**

ウィーンのことばかり書いたが、この国の田園の美しさについてはぜひ語らねばならない。日本の田舎のようにどこもかも耕地になっているのではなくて、大半は空地で、それが青々とした芝生になっている。私のいた所では、山はほとんど見えないで、見渡す限り小さな丘が起伏し、広い線の中のあちこちに赤い屋根の、玩具のような家が散在し、向うの方には濃緑の樅の森、こちらには奇麗に並んだ白樺や楡の林、その間をささやかな小川が流れている、見苦しい電柱なんか一本も見えない、全く絵を見るような、うっとりした眺めである。よく外国で修業した画家の絵にこういう風景が描かれているのを、今まではボンヤリと見て何の興趣も湧かなかったのに、この風景を実際に見るに及んで、なるほどこれが描きたかったのだなあ、と初めて合点が行くのだった。しかも本当は、この風景は絵や写真では到底再現し得ないものを持っている。春の太陽の下に自分の眼で見なければ、その味わいは分らない。私はこれだけでもオーストリアへ行ってよかったと、しみじみ思っているのである。

（文学部教授・ドイツ語）

# 女子中・高校の創立記念日

## ―制定の由来に関する混乱を正す―

窪田哲三郎

### 1

同志社女子中学校・高等学校では、明治十年（一八七七）四月二十一日を学校創立の日と定め、毎年四月二十一日は授業をやめて創立記念式を挙行し、創立者立学の精神を想起しながら新たな発展を誓いあっている。この記念式は戦前の女学校時代から引継がれた伝統的な行事であるが、では何の由来でこの日が創立記念日に制定されたのだろうか。従来の学園要覧や生徒手帳（一九六六年度まで）の沿革概要をみると、「明治九年十二月下旬京都御所御園内旧柳原邸に同志社女学校を創立」し、「同十年四月二十一日上京区今出川通寺町西入現在の地に校舎を新築移転した」となっており、この限りでは旧柳原邸より現校地へ移転した日をその根拠としている。

ところが、この移転の時期に関して、困ったことに従来の同志社刊行物の記述は一定しないのである。一例をあげよう。昭和五年に刊行された『同志社五十年史』の場合、〃同志社の成立及発達―同志社女学校〃の項では、前記の学園要覧とほぼ同様な記述であるが、同書の〃制度―同志社女学校〃の項では次のように変わってくる。同志社女学校は明治十年四月御所外苑柳原大納言旧邸内、ミス・スタークウェザー宅に創立（ス嬢は当時デヴィス邸に同居していた―筆者註）。翌十一年九月今出川通寺町西入、二条関白邸趾に新築の女学校校舎竣工し、同所に移転した……。

つまり発足の時期と場所、現校地への移転の時期が両者では明らかに食い違い、現校地へ移転したのは、前者が明治十年四月、後者では十一年九月となっている。このような混乱はその他同志社刊行物の随所にみられ、女学校においても戦前の学園要覧（昭和五～十七年）には、戦後とちがって十一年九月移転の記載がみられる。

### 2

新校舎の完成や移転の時期がたとえ一年、二年のずれがあっても、普通の場合なら取立てて問題にする必要はあるまい。だがこの場合、女子部にとって大切な意味をもつ創立日と直接関係することがらであり、毎年挙行される記念式をはっきり意義ずけるためにも、事実に対する正確な認識をもつべきだと思う。幸い筆者は『同志社九十年小史』の女子中高の項の執筆を命じられた機会に、故田中良一氏の御教示を受けつつ、女子部創設前後の事情について若干の検討を試みてきた。『九十年小史』では紙数の関係から詳細に触れることができなかったので、この誌上を借りて移転・開校時期に関する卑見を述べておきたい。

### 3

発足以来九十年余の歳月を経過して、女子部創設の経過に関する資料はほとんど失われてしまった。今では断片的に残された僅かな記録からたどるほかないのであるが、ここでは『同志社記事』とよばれる新島先生自筆のメモと森中章光氏が編纂された『新島襄先生詳年譜』の中から女子部創設期に関する記事を抜出してみよう。

（同志社記事の大部分は詳年譜に収録されている。また詳年譜の中で森中氏自身も史料的に疑問視されているものは除いた。）

明治九年　五、六月の頃から柳原邸のデヴィス方同居スタークウェザー女史の室で京都府農斉藤某の女児（七、八歳）と丹波綾部旧藩主九鬼隆備の二女児を教える。その後高松セン・山本ミネ・下村智基・同末・伊勢ミヤ・本間春ら引続き加わり、新島八重夫人もスタークウェザー女史と共に教える。（詳年譜）

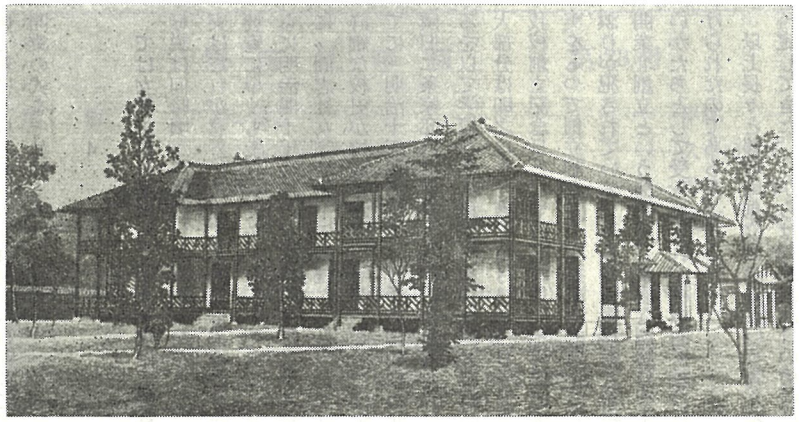
＊別に新島夫人はその回想の中で、明治九年二月頃から新島邸に三人の女子と一人の男子を教えたが、明治十年春、学校をデヴィス邸へ移したと述べている。（同窓会期報三十九号、大正五年）

明治十年三月二十七日　京都府に於て女学校を伺候ところ御差えなきよし。（同志社記事）

同四月二十一日　柳原邸にて女学校開設す。（同志社記事、但しこの条は同志社記事でも明治十六年二月以後に別人によって書かれたもの）

同四月二十二日　今日同志社分校女紅場開業願差出す。（同志社記事）

同九月二十一日　女紅場名称を女学校と改む願書下る。（同右）



明治十一年に建てられた女学校々舎

明治十一年一月十日　上京区第一一区今出川通寺町西入常盤井殿町北側（六〇七番地・六〇八番地・六二二番地）合地分地四九六九坪九合（第七四八番地）の地券堀本利慶方へ交付ありて堀本より地券を新島に渡す。（詳年譜）

同一月二十四日　上京区第一一区今出川通寺町西入常盤井殿町北側堀本利慶所有地借用地六二二番地に同志社女学校建物一棟建築着手、戸長まで届出。（同右）

同九月十六日　この日をもって同志社女学校を正式に開校する。校長新島襄、教師アリス・スタークウェザー、フランセス・パーメリー、舎監山本佐久

以上の記事から同志社女学校の創立経過を要約すれば次のように考えられよう。明治九年になって新島邸、次いでデヴィス邸で数人の女生徒を集めて私塾が開かれた。その時期は二月から五、六月の頃、やがて正規の女学校を発足させるため、明治十年四月二十二日に京都府へ開校願書を提出し、同月二十八日に許可された。そのときの校名は「同志社分校女紅場」と称し、校地はデヴィス邸（御苑内柳原邸）であった。同年九月二十一日「同志社女学校」と改名し、生徒数が増加して校地が狭くなったので、翌十一年現校地である常盤井殿町北側、二条関白邸址に土地を求め、校舎を新築して移転した。移転が完了し、正規の課程により本格的に開業したのは同年九月十六日である。

従って、少なくとも女子中高において、創立記念日の根拠としてきた明治十年四月二十一日現校地移転説は誤りとせねばならない。さらにこの主張を裏づける別の史料として、明治十一年六月生徒募集のため発行された「同志社女学校広告」（同窓会期報第二十九号・明治四十三年所収）の前文を携げておこう。（傍点筆者）

「去し明治八年の冬同志社てふ英学校を開きしより未多くの年月をも渡らざるに、（中略）此楽を少女子等に分ばやとして去歳の四月官の許を得て上京第一一区なる中筋通（御苑内旧柳原邸の東側通り―筆者註）に仮学校を開きて米国の女教師アレスストツクウェザルを招て少女子の心得となるべき事必要の学など教へたりしが、今一しお盛大になさばやとて此度上京第一一区なる今出川通に広き場所を撰て新に学校を営み本年九月十六日新校にて開業の式をぞ執行ふべき……」

## 4

では女子中高の通説となった十年四月の移転説は何時頃から現われてきたのだろうか。実はこれが意外に古く、明治二十八年の学園要覧に早くもその記述を見出すのである。さらに明治四十年発行の女学校期報第二十九号に〝同志社女学校三十年略歴〟としてかなり詳細な校史が掲載されているが、そこにはすでに「明治十年四月二十一日予て御苑内の北隣旧二条家邸内に新築中なりし校舎落成したるを以て学校を之に移転せり。現在本校舎の大部分は即之なり。爾来四月二十一日を以て我校創立記念日となすに至れり」と移転の事実をもって創立記念日の根拠にあてるという誤りが犯されている。恐らく新築移転→新規開業＝創立という図式が、素直な理解しやすいかたちとして受入れられ、機械的に結び付けられたのであろう。

以上長々と移転即創立記念日という考えを否定してきた。しからば創立記念日の根拠はどこに求めればよいのだろうか。残念ながら



そのものずばりを説明した資料を見出せないので臆測の域を出ないが、女紅場開業願を十年四月二十二日に京都府へ差出したと新島先生自筆のメモにあるところから、その決定がなされた日、或は開業願の日付がその前日の四月二十一日だったのではなかろうか。従って明治十六年以後から記録に現われてくる「明治十年四月二十一日柳原邸に於て女学校開設す」という意味は、その日に、私塾を改め官許による正式の学校の開設を決定す、と考えればよいと思う。

最後に強調したいのは、たとえその由来がどうであろうと、創立記念日それ自体が長い伝統を形成してきたことである。最初の式典は明治二十一年十一月二十一日に「創立十年期祝会」が開かれた。これでは創立年次を明治十一年としたことになるが「二十年期記念祝式」は三十年四月二十一日に挙行されている。創立記念日の基礎はここに定まり、以後例年行事となって女学校の歴史の中に定着した。創立記念日が歴史的な実在として伝統化している以上、事実に対する正確な認識をもたねばならないと考え、あえて小文を記した次第である。

〔付記〕女子部の歴史に関して、最近武間富貴同窓会長が詳細な年表を作成された（『同志社創立九十周年記念誌』所収）。主として明治二十七年に創刊され戦時中まで継続刊行された女学校期報の記事を中心に編纂された労作で、女子の立場からつくられた最初の本格的年表である。同表には明治十年四月二十一日の条に、「女紅場と称していた女子塾を同志社女学校と改称す」とあって、筆者とは別の見解が示されている。一考を要する問題であろう。実は筆者も「開業願」そのものを求めて、明治以降の諸記録が府庁から移管されている京都府綜合資料館の文書を探索したが発見できなかった。しかし同時期の他校の開校願が二、三見出せるところから徹底的に調査すれば発見の可能性なしとしない。そうなれば開校経過も自ら明らかになると思う。

浅学の身をかえりみず駄考を綴ったが、史料の誤認、独断等、誤りの多きを恐れる。大方の御叱正と御教示をまちたい。なお小文を記するに当って御教示を賜わった武間富貴同窓会長、社史資料編纂所小野則秋、森中章光の諸先生に心から感謝申上げる。

（女子中・高校教諭・社会）


**同志社時報　第28号**

| | | |
|---|---|---|
| 読物 | 大正期の蘆花 | 平林　一 |
| | 私の見た健次郎叔父さん | 久布白落実 |
| | 叔父・徳富健次郎 | 湯浅　八郎 |
| 人物誌 | 「大西　祝」 | 笠原　芳光 |
| | ベトナムの子供たち | 中村　遙 |
| 歴史散歩 | 「安　中」 | 江川　栄 |

随想・画と文・私の研究ほか

一部　100円　　年6回発行

# 大学予科の思い出(一)

南石福二郎

大正八年四月七日午前七時四十分、彰栄館の塔の上から打ち鳴らされる鐘に招かれて、中学の生徒たちがチャペルの中に集り入る。その中に筆者もはじめて招かれて壇に登り、新任教員として紹介された。これが私の同志社に奉仕するにいたったはじめであって、それが昭和二十年三月、当時の政府の戦時措置要綱実施の結果として大学予科教授を辞するまでつづいたのである。中学には大正十五年三月まで鈴木吉満、末光信三両学長の下に、大学予科には同年四月から前記退職まで速水藤助、日野真澄、柴山健三、木畑浩四郎、山田貞夫の五予科長の下に（私は教鞭は執ったことがない）黒板の前にチョークを執りつづけていたのである。中学においての思い出も多多あるが、今は予科における思い出の一つ二つをここに書いて見たいと思う。

ただ一つ中学の時分のことで同志社の歴史に書きのこしておきたいことは、現在、学園内の建築物の中では見栄のしない木造二階建の聚芳館の由来についてである。聚芳館については「同志社九十年小史」に述べてはある。大正十年頃中学の生徒数がとみに増加した。しかるにそれに応じうる教室の数が足りない。校舎の増築が急務であるといって鈴木学長は資金を父兄に訴えて校舎を新築する計画に踏みきった。今日においては平凡の計画であることがその当時においては破天荒のことであったので、理事会は首を振った。ただ一人大沢徳太郎氏が鈴木氏を陰に陽に奨励し、また自身父兄の立場で多額の負担をされたのである。かくて中学の教員総出で父兄訪問を行ない、協力を求めて出来上がったものが聚芳館で、その名は生徒各々のレプタを集めたものの結集であることを表わすものである。大正十一年の卒業から昭和二年か三年頃までの中学卒業の校友はみな聚芳館の建設に参加されたわけである。

## 大正から昭和へ

何という運命の皮肉か、大正十五年のクリスマスは日本国民にとっては諒暗の日となった。二十六日から三十一日までの六日は昭和元年ととなえられることになった。昭和三年十一月十日今上陛下の御即位式が紫宸殿において行なわせられ、こえて翌十一日各地から京都に来られた御大典参列者のうちのクリスチャンたちが同志社の運動場に特設された式場に集って市内信徒たちも同志社の教職員も皆参加して基督教式による祝賀式を挙げた。ちょうど大饗宴の行なわれた後であったので、地方から来られた方の中には勅任官の大礼服着用でおられた方が十数名あり、その中に大工原九州帝国大学総長と荒川文六教授と

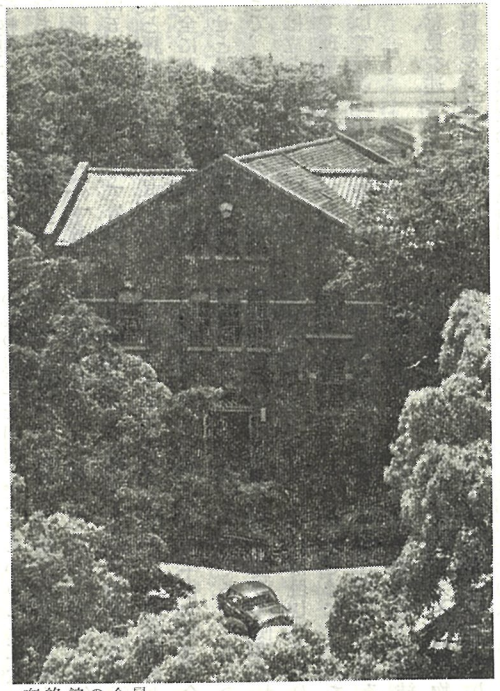


が相携えておられたのが人目を引いた。

御大典期間中、同志社教職員は順番に学園内に宿直勤務をすることにしたので、私はたしか二十日であったか、大嘗祭が行なわれる晩当直する番にあたった。陛下が仙洞御所において大嘗祭を行なわせられる午前一時という時刻に私はチャペルの前に立った。そして思わずチャペルの石段に跪いて祈った。今し大嘗祭御執行中の聖上のため、また皇国のため祈ったのである。ゲッセマネを今この場合にいうのはおこがましき至りであるけれども心は一つであった。その三日後のことである。朝まだき空に星を見る時戸を叩く者があった。「大変です。早く来てください。予科が焼けています」と。馳せつけてみると有終館の内部がすっかり焼けて正に鎮火したところであった。消防隊が盛んに活動していた。水管が水でふくらんでいた。火事場の前で高商の中川精吉氏に出会った。「もう消えましたよ」とのことであった。本部（現在の弘風館の位置にあった木造二階建）会議室に予科の同僚が皆集まっていた。ぼう然手の下しようがない状態であった。そこへ中川氏から予科の立退きに徳照館（現在の神学館のある位置にあった木造建築で当時高等商業学校の校舎）の当分使用を提供されたのに励まされて当面の善後策が次から次へと取られていった。

## 有終館取りこわし反対運動

現在、同志社本部のある有終館の礎石には明治二十二年という文字が刻してある。階上の現在総長室である部屋で新島先生が事務を執っておられたということを私はかねて堀貞一氏から聞いている。そうすると有終館が竣工したのも明治二十二年と推定される。これは図書館として設計され、また図書館として使用された。そして政法学校と文科学校が前後してこの建築物を校舎として創設された。とするならばこの建物がまさに大学の（神学部を別にして）発生地であるといってもよい。有終館という名称は海老名総長の命名によるもので、入口に掲げる扁額の文字は海老名氏の揮毫にかかる（次頁写真）。それまでは旧図書館と呼ばれていた。終戦後、本部がアーモスト館からここに移転するまで、有終館は大学予科の建物であって予科教室に使用されていた。私はこの館に二十年の奉仕を続けたのである。



有終館の全景

海老名彈正筆の扁額（現在、有終館２階にかけられている）

さて、この有終館から御大典行事中に火事を出したというので、総長はじめ理事が総辞職をして陳謝の意を表した。そして理事の選挙を行なったところ、前理事が揃って再選された。新理事会は総長に大工原銀太郎氏を選挙した。そこで学内に悶着が起こったのが、「同志社九十年小史」に記載されてある「不祥事」であった。九十年小史に「若干の犠牲者」と記載してあるその一人が中島重教授であったことは昭和四十二十月、竹中教授が芦田記念講演の中に詳説されたところである。

ところで大工原銀太郎博士が総長に就任する早々、理事会はある一つの事を決定した。それは焼け跡の有終館を取りこわせとのことであった。焼け跡を整理せよといえば分かりきった当然のことであるが、有終館の外壁はそっくりそのままの形態を残していたのである。京都大学の武田五一教授が日本中で貴重な設計の標本であると評価せられた十字形の建築の輪廓だけは完全に残されていたのである。これを取りくずせとは大学発達の遺跡を抹消せよということで、もっての外のことであると予科教授たちは立ち上がった。学生も立ち上がった。そこで理事会にむかって取りこわし決定を再審議してもらいたいと陳情におよんだのである。

まず大工原総長に意見を述べると、総長は予科教授会の意見に賛意を表せられた。次いで理事諸氏を歴訪すると大沢徳太郎氏も石川芳次郎氏も総長と同様に予科教授の要望を支持している。ただ東京にある理事の中に強く有終館外壁を撤去するようにと主張する者があって、その根拠は元来あの建築は不法建築物で危険物であるという点にあった。ゆえに火災を機会に取りこわさなくてはならぬ、というので理事会が取りこわしを決議した事情が明らかにされた。

そこで予科教授会は東京にある理事にわれわれの意見を開陳しようということになって、速水藤助氏と柴山健三氏と私の三人が教授会を代表して上京することとなった。三名は総長および在京都の理事の了解を得て夜行上京し、日本クラブの一室で小林正直氏および三宅驥一氏と午前十時から午後六時まで会談した。今でいえば団体交渉であったがその当時にはまだ団体交渉という言葉は使用されていなかった。またわれわれは目じりを釣り上げ、卓をたたくという態度ではなく、礼をつくした請願の態度で両理事に対し、むしろ今日いう話し合いを行ったのである。その結果、理事会は前の決議を改変して不法建築物に鉄筋コンクリートで裏うちをすることにした。結果からいえば鉄筋コンクリートの新築に焼け残りの外壁をそのまま用いて外装としたのである。それが現在の有終館である。

（つづく）

（校友・下関梅光女学院短大教授）

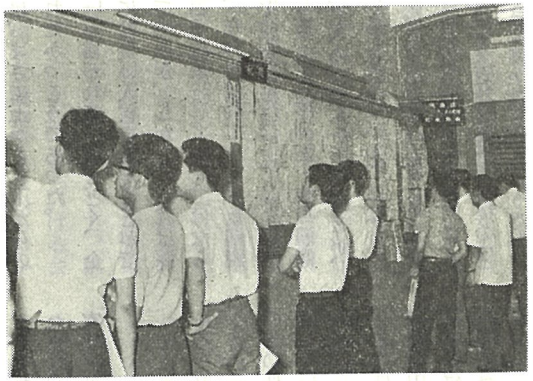
＊　＊



# 求人異変

## ——就職部員一年生の喜びと悲しみ——

市村　真



社会と大学を結ぶ接点〝就職部〟。永い間教務部の入学試験の仕事をしていた僕にとって、職員の定期人事異動は、単に「仕入係」から「販売係」に移るのだろう、ぐらいの軽い気持であった。しかし就職部へ移って僅か半年の間に、この〝就職〟と言うたった二字の中に、同志社大学に対するいろいろな社会的評価が集約されていることを改めて認識させられた。

僕はかって二十号に「とさ廻り」という拙文を書いたが、その中にも述べている通り、高校生あるいはまたその父兄が、進学に対する態度を決定するとき、遙か四年先の就職に関する諸問題を展望している姿に、僕は幾度となく遭遇している。

もちろん、ことわっておくが、大学というところは就職のためだけに存在するのでもなければ、いわんや就職試験受験のための予備校ではない。しかし卒業する学生のほとんどが職に就くことによって、社会人として巣立っていくのが現実である。つまり、学生の実質的な力は、結局、卒業する学生の就職の場において表現され、決定されるのである。

会社の説明会や、就職部の主催する就職講座、あるいは懇談会など、熱心に出席する学生たちの姿。就職部のカウンターに相談に来る学生の真剣なまざざし。ギラギラとやけつく太陽にも似た学生たちの顔顔顔ー。僕はまさに就職戦線たけなわの就職部にやって来た。大学中で一番暑いと言われ、しかも生協食堂の換気扇の騒音と悪臭に悩まされる部屋での仕事。冬の陣（入試事務）に慣れていた僕にとっては苦通の毎日であった。

＊

さて、今年度の求人については題名の通り異状であった。その原因の一つは求人件数の異常に多いことであり、一つは明年三月の卒業生が少ないことである。後者については、昭和二十年生まれの学生が、戦争による影響を受け、全国的に少なく、求人活動を活発にさせたと見られているが、前者については、いろいろと分析されているようである。その一つとして学校指定の枠の拡大があげられる。

僕は先般、今日の花形産業といわれる自動車メーカーの某会社へ出向いた。ここは学校指定の枠がきびしく設けられ、東京の有力私立大学をはじめ、同志社大学の文科系へも求人をしていない。人事担当者の話によると「旧帝大で充分」といいきって、同志社大学など

お呼びでないと言わんばかりのあしらい方であった。このような会社が在来多くあった中で、今年は人事硬化を防ぐため、広く人材を求める傾向を打ちだす企業が出て来た。

さらに中小企業の中でも、在来、大学卒業生の採用をしていなかった企業が、将来企業の生存と規模の拡大を計るためには、どうしても大学卒の採用にふみきらなければならないことを認識して、積極的に求人活動を開始し出した。大学は、まさに上からと下からのはさみうちにされたかっこうであった。

「企業は人なり」と言われているごとく、企業の繁栄・発展には良い人材を欠くことができないのは事実であるが、しかし、これは採用人員の増員と言う現象として捕えてはならない。なぜなら、昨今叫ばれている少数精鋭主義・能力主義的人事採用方式だからである。またそれに関連して、年功序列型・終身雇傭の形態からの移行も、ゆるやかにではあるが、すでに始まっていると見てよいのではないだろうか。事実コンピューターなどによる事務の機械化が進み、管理部門（間接部門）の人員削減を行なっている会社の数は相当にのぼり、門戸は一見大きく開かれているようだが、開かれた扉が広ければ広いだけ、その中に入る道は反対に狭い。

したがって、会社と学生の間にある就職部も、飽くことを知らぬ求人側の金と時間をかけての再募集攻勢で攻めたてられ（応募者が無いからではなく、少しでも良い人材を採らんがため）、学生の数は熾烈な入社試験競争にあふられ、併願するため何十倍にもふくれ上り、双方の波に押し流されそうな状態である。それも就職斡旋開始の時期をピークとした波は、まるで僕たちにとっては津波が押し寄せて来る感じである。

＊

ところで今年度の求人件数は、今までのところ、文科系だけで約四、〇〇〇件（再募集を含めて延約五、五〇〇件）。昨年の約三、〇〇〇件と比較して約一、〇〇〇件の伸びを示している。もちろん戦後最高の求人件数である。

求人件数の多いことは、学生にとって職業選択の巾がそれだけ広いということで、まことに喜ばしいことであるが、しかし、これも量的にみて、必ずしも国・公立、また他の有力な私立大学に比して、まだまだ優位にあるとはいえず、質的にも四〇パーセント近くの求人会社に応募が一人もいない現状で、まだまだ求人件数が多いということのみで、手放しに喜んではいられないのが現実である。ちなみに昨年度の企業規模別求人状況は、文科系で、資本金十億以上の企業は僅か一〇・八パーセント。工学部では一割に満たない一九・四パーセント）。それに比べ、中小企業は文科系で六〇・三パーセント、工学部で五六・一パーセントと過半数を占めている。またこれを地域別にみると—日本の大企業の約七割は東京に集中しているといわれているが—同志社大学に求人している東京所在の会社は、全求人会社数の約二割強、三割に満たない（昭和四十二年度同志社大学就職要覧による）。

＊

先般、私立大学連盟主催による就職事務の研究集会が開かれ、企業側からも参加して大学と業界との意思疎通の場がもたれた。席上、学業成績と入社試験成績との相関関係について、必ずしも関係が深いとはいえないとする企業もあったが、やはり成績が良いのは努力の結果であり、概して学業成績の良いものは理解度が高く、入社後も問題意識をもって仕



事に取り組む者が多いとの企業サイドからの意見が出された。会社の社員募集要項などには「環境に甘んじて、ただ目先の安全を計ることなく、苦境をのり越えていくファイトに燃えた個性ある人材を求む！」などとうたってはあるものの—これはあくまで最終的にはこのような人物を求めるだろうが—第一関門の筆記試験でほとんどの者がバタバタと討ち死にする。もはやこうなれば、ひとり就職部の斡旋技術の問題ではない……といってしまえばそれまでだが、昨今の「寄らば大樹のかげ」気質の学生には、安定性ある超巨大企業にますます人気が集中するなかにあって、就職部は学生の「いきたい会社」と「いける会社」のギャップを何とか調整できないものかと苦慮しなければならない。また逆に求人開拓の結果、せっかく一流の企業から求人をして来たのに、どうせ受かるまいとか、入っても他大学の学閥に押さえられるにきまっていると、あっさり受験をあきらめてしまう学生も少なくない。にもかかわらず、一流企業への求人開拓は、就職部の欠かせない、いや、もっとも力を入れなければならない業務の一つである。

＊

この研究集会で出された各大学の話題で、ほぼ共通していた点として、学生数に比べ、就職部のスタッフ不足の問題を挙げることができる。

就職事務の能率化や、会社資料の整備は、年を共に進んでいるが、学生一人一人に対するキメこまかい職業指導ができる程度の就職部員の絶対数にはほど遠く、また気楽に相談に応じられるような面談室など、施設面も充分とはいい難い。先に述べた無応募会社四〇パーセントの中には、相当の優秀な会社を数えることができそうであるが、それとて会社の収益力や成長性などを的確につかむことは不可能に近く、まして学生の適性をいちいち把握できていない就職部は、学生に対して積極的なアクションがとれないのが現状である。

＊

さて、四十三年度の就職戦線はどうだろうか。一般に景気は再び後退し、「曇のち雨」と占うむきもある。現に景気がよかったといわれた四十二年ですら、「中小企業の倒産件数は半期で約四、五〇〇社にのぼり、悲劇のいけにえともいえる自殺者も年間一四、八三七人、過去七年のベトナムでの米軍戦死者総数に匹敵する」と暗いニュースが報じられている。更に企業には貿易自由化の波、大学就職部にはベビーブームの波が遠からずやって来る。そして少数精鋭主義的採用の傾向は更に強くなる……となるとあまり楽観できるファクターは見当たらない。

人類の進歩と調和をテーマとする例の万国博をテイク オフ ボードとして企業の飛躍を指向し、特に関西の経済的地盤沈下を防ぐため、努力している企業は多いといわれている。京阪神地方に求人会社の過半数をもつ同志社大学も、他流試合に勝ちぬく実力をそなえた学生を、どしどし送り出せるだけの内部的充実を計ると共に、求人をして来ない多くの会社に対して、地道な求人開拓活動を続けなければならない。

今年度の求人異変は喜びであった反面、求人件数の多い割に就職状況は、ほぼ例年なみにとどまり、格段の飛躍はみられず、更に、同志社大学に求人すらしない会社のまだまだ多くあることを知らされたことは、僕にとってまさに悲しみでもあった。

（大学職員）

# 勤労青少年と就職

土山　登

商業高校は、働きながら学ぶ勤労青少年のために設立されたものであることはいうまでもない。そこで本校の職業指導担当の教員は卒業生に対する求人はもちろんのこと、在校生に対しても、日常、就職のあっせんを行なっている。ご承知のように、近年、若年労働者の不足が社会的に大きな問題となっており、本校でも、在校生に対し、毎日のように求人があり、その応接に多忙をきわめている。学校の掲示板には、常にたくさんの求人案内が貼られ、一見、商高生にとって、選択の自由が増し、恵まれた印象を与えるかもしれないが、その内情については種々の問題をかかえている。

本校では、毎年五月にこれら在校生に対し実態調査を実施している。今回は、この調査にもとづきながら商高生の実情と、卒業生に対する求人状況について紹介してみたい。

## 有業者およびその形態、給与

有業者率は過去二年間（昭和四十年度七八％、昭和四十一年度七八％）に比較すればやや上昇している。また、一般的傾向として、一、四学年が二、三学年に比して有業者率が低いが、これは、一年生は入学して学校に馴れてから就職を希望する者があり、四年生は大学進学希望のため就職を止める者が若干いるためと思われる。

本校としては、無職者に対しては働くようすすめているが、本人や家庭の反対で就職しないものが若干いる。

有業者の勤務形態では、通勤が七二％で圧倒的に多く、次いで自家営業一四・九％、住込み一三・一％と続いている。昭和四十、四十一年度においては、僅かであるが、住込みより自家営業の割合が多かった。

給与の形態は、通勤者について、月給が七一・六％、日給が二五・八％であった。日給に比較して月給の方が安定しているように思われるが、いわゆるアルバイトの形では日給の場合が多く、生徒の方でもその方を希望する者がかなりある。それは本務という形ではいろいろ束縛もあり、学業に差支えるので、アルバイトの形態を希望するのである。また

**第1図**

| | | 無職 | 有業者 |
|---|---|---|---|
| 1年 | | 17 | 75 |
| 2年 | | 14 | 106 |
| 3年 | | 26 | 98 |
| 4年 | | 25 | 103 |
| 計 | 計 | 82 | 382 |
| | % | 17.1 | 82.3 |



ごく僅かであるが時間給もある。

つぎに、給与額であるが、月給についていうと、各学年とも相当広範囲に分布している。下は、一二、〇〇〇円から上は三〇、〇〇〇円の間に分布しており、特に集中する層は見当らなかったが、一年生では一五、〇〇〇円台が最も多く、二年生でも、一五、〇〇〇円台、三年生では、一八、〇〇〇円台、四年生でも、一八、〇〇〇円台が最も多かった。しかし、それとても目立って集中したわけではなかった。

ここで目につくことは、一、二年生の間および三、四年生の間に差がなく、全体でカーブをかいてもかなりでこぼこの曲線になる。このことは、社会の給与体系が混乱していることを示している。これは若年労働者の初任給の引上げが活発であり、企業内でも、従来の従業員とのかねあいに苦慮しているようである。いずれにしてもこの傾向は、今後とも当分続くものと予想され、生徒間に相当の給与差が出ることは避けられないようである。

雇傭主の方では、とにかく従業員獲得のため給与引上げのみ考える傾向があるが、生徒の方ではむしろそれ以外の条件を重視する傾向がみられる。例えば、勤務時間が長いのや就業開始の時間が早いものなどは敬遠する。

なお、住込みや自家営業の給与については、その支給方法が千差万別で、その実態をなかなか把握できないので省略した。

## 勤務先の規模および業種

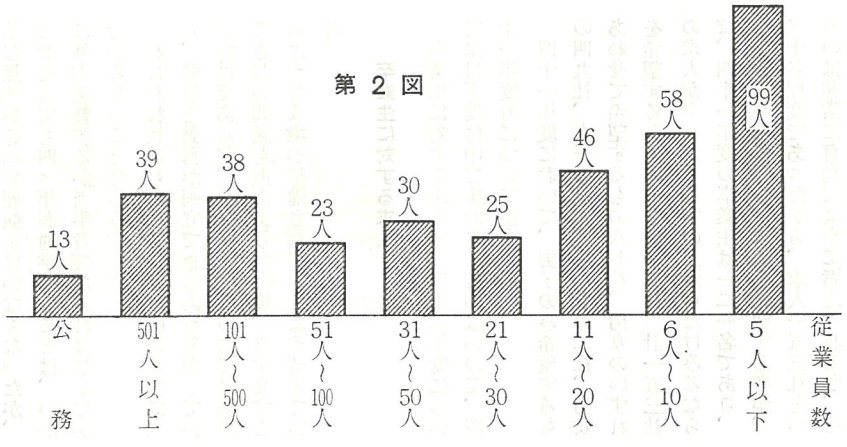
本校では、勤務先の規模については、その従業員数によって分類している。（第2図参照）

第2図から、生徒たちの勤務先は、圧倒的にいわゆる零細企業の多いことがわかる。とくに十人以下の企業に勤務するものが、勤務者全体の四一％を占めており、五〇一人以上の場合は僅か一〇％である。

これら零細企業では、とかく労働条件も悪く、休日も満足にとることが困難など種々の問題をかかえている場合が多い。本校では、運動会、文化祭などを日曜や祝日に行なうのであるが、この場合でも、勤務先が休みでなく、止むなく参加できない場合が相当数ある。

また、これらの企業では、家族で営業している場合が多く、家庭的雰囲気でうまくいく場合もあるが、いったん、意思が疎通しなく

**第2図**



なると、小規模のため配置転換も望めず、解決が困難となる。このいわゆる人間関係の難しさを訴える生徒もかなりいる。

給与的には、以前に比較すれば随分改善されたが、労働条件や労働環境となるとまだまだ不備な点が多々存するわけである。

従業員五〇一人以上といった比較的大きい企業の勤務者については、ここ数年一〇％程度で変化はみられない。しかし、これらの企業でも中学卒業者の確保が難しくなったため、従業員の採用を高校卒業者に切り換える傾向が、近年増加している。また、大企業では、企業内に学校（学校といっても各種学校としての取扱いしかない）を設け、従業員が外部の定時制高校に通学するのを好まない場合もあるようである。

つぎに、勤務先の業種としては、卸売・小売業が三三％で最も多く、繊維製造業が二二・三％でこれに続いていた。サービス業は、割合少なく一〇・二％であった。

繊維製造業が多いのは、西陣を近くにひかえた本校の地理的事情からもうなづけるところである。

## 勤務地と現住所

現住所は、上京区が一一六名でトップ、次いで左京区が七〇名、以下北区、中京、右京伏見と続く。勤務地では、上京区が一〇七名次いで中京区八四名、以下下京、左京、右京が続いている。

定時制の場合は学校の所在地、現住所および勤務地の関係が深いようで、本校でも現住所、勤務地ともに学校の周辺部に集中している。これも当然毎年同じ傾向を示している。

遠方では、東は滋賀県野州、西は大阪市に現住所があるものもいる。

以上在校生の実態について述べたわけであるが、すでにふれたように、本校の場合八割の生徒が、なんらかの勤務に従事している。しかし、入学時に比べて卒業まで続く生徒が相当数減少していることからみて、勉学と勤務の両立をはかることがいかに困難であるかを物語っている。それは、本人の努力の足りない時や、病気で止むなく退学する場合もあろうが、周囲の無理解、偏見、差別等本人に責めを帰することのできないときもある。さすがに最近では、一昔前にみられたような無茶な無理解を示す雇傭主はいなくなったが、なおそれでも四ヵ年間通学することは、いかに努力を要するか当事者でなければなかなか分からないことだろう。

われわれ教員も出来るだけ生徒の立場に立ち、勉学と勤務が両立できるよう努力しているわけであるが、われわれ個人の力では解決できない問題も沢山あり、今後、ますますこのような環境が整備されていくよう望んでいる。

## 卒業生に対する求人

卒業生に対する求人は、四十二年度については目下受付中で集計されていないので、四十一年度分について紹介したい。

四十一年度において、男子のみ希望するもの四九社、女子のみ希望するもの二社、男女あわせて希望するもの八七社、男女のいずれを希望するか不明のもの一五社、計一五三社の求人があった。数字の上からだけみるならば、四十一年度の卒業生は一二一名であり、そのうち卒業に際し、求職を希望する者が、三十名程度であったから、求人一五三社というのは非常に有利なように考えられるが、そ



の内容については、種々の問題がある。

まず求人先の業種であるが、やはり卸売・小売業が圧倒的に多く、全体の半分以上の八四社あった。次いで繊維製造業、その他の製造業等が多かった。毎年同じであるが金融保険業は皆無に近く、僅か二社あったのみである。

また、規模については、これも中小企業が圧倒的に多く従業員一〇〇人未満のものが六四社であった。これに比し、一、〇〇〇人をこえる企業は一割に満たない一一社であった。

給与については、一八、〇〇〇円台が四七社で一番多く、次いで一七、〇〇〇円三二社一九、〇〇〇円二七社が続き、二〇、〇〇〇円台一一社、一五、〇〇〇円台が三社で、さすがに一五、〇〇〇円をきるような企業は一社もなかった。

以上見られるとおり、定時制卒業者に対する求人にも偏見がみられる。大企業からの求人は僅少であり、特に金融界関係は完全にその門戸を閉ざしている。一方給与の面でも、初任給一八、〇〇〇円程度が普通であるが、これは卒業者にとって、現在もらっている給与と同じか、もしくはそれ以下となる。したがって、卒業する者にとって、自分が現在勤務している会社と大差のない企業でしかも給与がダウンすることになると、転職の希望も消えがちとなり、本校の卒業者に対する就職あっせんが低調な一因となっている。

もちろん大企業に勤務することのみが、生徒たちの幸福につながるものでもなく、かえって自分の能力を最大限に発揮することは、中小企業におけるよりも困難であろう。

しかし、だからといって、始めから定時制の生徒に対し、就職の機会を与えないことは重大な問題である。

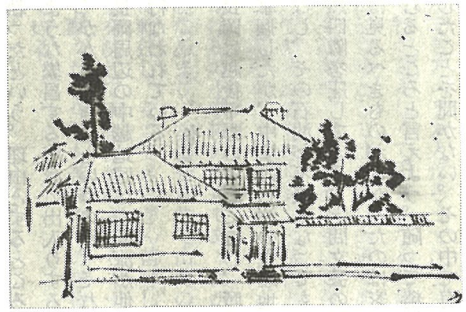
今日、学歴偏重とか、能力主義とかいろいろお題目は並べられているが、現実には、このような差別が厳然として存在している。四十年十一月現在の文部省調査によれば、差別をする事業所は全国で大企業九、一八八社、中小企業八、四九五社、小企業三、八七七社計二一、五六〇という数字になるそうだが、これをみても、大企業ほど差別がひどいことがわかる。

また、在校中、大企業に勤務している者でも卒業に際し、高校卒業者として取扱わない企業が大部分である。

今後、日本の企業も国際競争の激しいうずまきにまきこまれると予想される今日、このように能力を正当に評価しないという日本の現状について、われわれは不安をいだかずにおれない。

われわれは、一日も早く、これら定時制の生徒に対しても門戸が均等に開かれ、その能力を充分発揮できる日の来ることを願っている。

（商業高校教頭・商業）



新島先生旧邸（三浦鉄造画）